



『家族の絆とは何か、僕が考えてみたこと』

～映画／小説『万引き家族』（監督／作：是枝裕和）を観た後で～

結城 俊哉

（福祉学科教員）

2018年6月中旬に、映画『万引き家族』（監督：是枝裕和）を鑑賞した。個人的には、『誰も知らない』・『そして父になる』・『海街ダイアリー』・『三度目の殺人』等々是枝作品は劇場公開される度に、映画館に足を運んで観ることにしている。個人的な趣味といえばそれまでなのだが、ドラマ作品は別として、映画として制作された作品をDVDレンタルして自宅のTVで観ることはほとんどしないことにしている。理由は、単純明快で自宅では映画の描く世界にのめり込めないからだ。前置きはこれくらいにして映画館で『万引き家族』の鑑賞後に、僕は、是枝監督が台本から書き下ろした書籍（宝島社）もその後に読んでみた。

今回の映画『万引き家族』は、第71回カンヌ映画祭のコンペティション部門パルムドール賞や第36回ミュンヘン国際映画祭のシネマスターズ・コンペティション部門アリ・オスラム賞の受賞と日本公開を前に海外で話題になったことに、興味を抱いた人たちも多くいたことだと思う。映画と小説化された書籍の内容について映画のネタに触れること無く、僕なりに「家族論として」講評すること自体が、実はかなり難しい試みなのだが…。しかし、この機会にこの映画を通して考えさせられた『家族の絆』について極めて個人的な感想を交えて論じてみたい。

『万引き家族』という映画のタイトルが登場人物たちをつなぐ、メタファーとなっている。そして、家族の構成員は、それぞれが過去と現在に何らかの司法に触れる犯罪（＝「万引き」は、窃盗罪にあたるものだ。）や日本社会の「暗部／歪み／ねじれ」とでも表現することができる「貧困問題・虐待問題・年金不正受給問題等々」の影を引きずりながら日々生きている。しかし、この作品が描く物語世界は、「善と悪」、「光と影」、「敵と味方」、「正義と裏切り」というような理解しやすい構成になっていない。

この家族は、夫・治（リリー・フランキー）と妻・信代（安藤サクラ）・子ども・祥太（城桧吏）（＝彼は、学校には通学していない。学校は、勉強ができない奴らが行くところだと考えている様子）、治の母親・初枝（樹木希林：2018年9月15日逝去）、そして、信代の妹・亜紀（松岡茉優）と団地のベランダで虐

待放置（ネグレクト）されていたところを、治と信代が保護し家族の一員となった「じゅり」（佐々木みゆ）（後に、「りん」と信代が命名）の6人が織りなす物語である。

この映画では、主人公たる家族を総称する本当の名字が無い。一応、「柴田」となっているのだが…「柴田家」の家族メンバーであるという「絆」意識は極めて弱い。祥太も「りん」も、治と信代を当然だが親とは思っていない。

互いに、名前（本名かどうか不明）で呼び合っている。そして、当然ながら、夫婦関係や、親子関係らしき家族としての意識や気配も全く感じられない。

しかし、皆なんとなく、何故か楽しく一緒に共同生活をしている感じなのだ。ただ、自宅は、初枝のものらしく不動産屋が、自宅・土地の売却の商談に来るシーンがあり、どうやらこの家は、表向きは初枝が独居老人として暮らしているという位置づけがされているようなのだ。

また初枝は、浮気されて離婚した元夫（映画では、すでに死亡してお仏壇に遺影がある。）がいたようで、定期的に別れた夫が浮気相手と築いた家族の息子宅に月命日のお参りと称して訪問しお金（慰謝料）を無心している。（最初は、嫌がらせのつもりが、定例行事化した様子）そしてなんと！初枝の自宅に家族として同居している亜紀は、その家族から家出した長女なのである。

しかも、初枝と亜紀の両親の間では、表向き向きは、亜紀がオーストラリアへ海外留学中という話になっている。その中で一瞬登場する亜紀の妹の「さやか」は、明るい優等生タイプ。亜紀が風俗店のJKビジネスでバイトの源氏名は、「さやか」（妹の名前）を使用していることから、なにやら複雑な家族関係を感じさせる。

生活費の収入源については、治が、建設現場などの日雇労働者、信代は、クリーニング工場のパートで働くが、途中である理由から解雇されるエピソードがある。それ故に、初枝の「年金」がこの家族を支える大切な収入源であった。しかし、それだけでは生活物資が不足するため、治と祥太（後に「りん」も加担しそうになる）、スーパーでのカップ麺・お菓子・シャンプー等々の「万引き」がこの家族の生活を支えてもいる。

物語は、「じゅり」の捜索願が、行方不明になって2カ月半もたって出され報道されたことから、この家族に変化の兆しが訪れる。その時まで、この家族の中では、身代金の要求もしていないという理由から、「じゅり」を誘拐したではなく虐待されていた子どもを保護して新しい名前の子「りん」がこの家族の一員になっていると皆が理解している。そして、夏を迎え、まるで仲の良い本当の家族のように海水浴場に出かけるシーンがとても印象的だ。

それ以後の話の展開は、この映画の本質に関わるため省略する。（詳細は、映画を観るか、書き下ろしの小説を是非お読み下さい。）

この映画＆小説を通じて『家族の絆とは本当は何か』について正直、実はかなり真剣に考え込んでしまっている自分があることに気が付き驚いたことも事実である。是枝作品のエンディングは、観た者それぞれに考える余地を残したままのオープンエンドが多い。つまり、作品のテーマの解釈は、鑑賞者一人ひとりに委ねられているという特徴がある。つまり、押し付けがましい結論（説教）めいたものは皆無でそして、それが良いのだと思う。

ここから、個人的な「家族論」的な解釈を表現するならば、この映画は、典型的な「血縁家族」という神話を完全に破壊していた。そして、それぞれが何らかの加害者や被害者として「犯罪」という＜絆＞で結ばれた家族の中で実に人間的な苦悩を抱えて日々を暮らしていたのである。

ステレオタイプの日本における社会福祉・社会保障の貧弱さの視点から解釈してしまうと、この家族がささやかに暮らすその姿は「健康で文化的な最低限度の生活」（憲法25条）の網の目からこぼれ落ちた人間群像を描いているとも理解できる。しかし、僕にとって、「そんな安っぽい受け売り」の社会福祉の理念を論じることさえ極めて強く躊躇させる印象的なシーンがある。

それは、家族の中で生じた「ある罪（犯罪）」を一人で背負うことになった安藤サクラ演じる「信代」が、取調室の中で涙を堪えるように呻く次の言葉だ。

「拾ったんです。…誰かが捨てたものを、拾ったんです。捨てた人は、他にいないんじゃないですか？」

このシーンでの彼女の思いは、小説の中では次のように書かれている。

私たちがいったい誰を捨てたというのだ。息子夫婦に捨てられた初枝と同居し、居場所を失った亜紀を居そうろうさせ、放っておいたら死んでいたかもしれない祥太とりんを保護した。それがもし罪に問われるのだとしたら、彼らを捨てた人々はもっと重い罪に問われるべきじゃないか。[是枝（2018）p.141]

この映画は、日常、私たちが思い描く「家族」という＜絆＞の欺瞞性を暴いているとも言える。「家族の絆」なんて本当は、「幻想にしか過ぎない」のだと。

この映画を観て「万引き」や「犯罪」に手を染めたいと思う人間はいないだろう。そうではなく、「家族」という在り方そのものへの「絆」という「幻想」を

断ち切ることで、人はある人間的な強さと優しさを獲得することができるのかも知れない。譬えてみるなら家族とは、夜空に打ち上げられ、一瞬だけ輝き、そして次第にその輝きを失い、消滅する花火に似たような儂い夢はかなのようなものなのだと。だからこそ、家族は、愛憎合わせ持つかけがえのない大切にしたい人たちになり得るのかも知れない。

僕は、この映画を観終わって以後、不思議とあの家族6人、一人ひとりがそれぞれの思いを抱え、ビルの谷間に「ドーン、パチパチ」と花火の音だけが聞こえてくる平屋の家の縁側から顔をのぞかせ、何故か嬉しそうに「夏の夜空」を見上げているシーンをとおして、思い至ったことがある。

「花火のように家族が一緒に居られる時間は、一瞬で永遠ではないのだ」と。

【引用・参考文献】

是枝裕和著（2018）『万引き家族』宝島社

大田圭二（2018）『万引き家族』映画パンフレット、東宝（株）映像事業部